

挑戦の座標軸

癌シリーズ

高木徳一

目次

一、	枝垂れ柳	2
二、	寒椿	22
三、	紫陽花	48
	あとがき	84
	著者略歴	86

一、枝垂れ柳

誕生は、棺桶への第一歩なり。人は皆、十字架を背負って歩み始める。

時は、雅彦が生まれて六十年目の翌日である。土砂降り雨が上がった六月六日の午後四時半に、雅彦は自宅を後にした。京成線下駅から乗車して都営地下鉄浅草駅で銀座線に乗り換え、隣の田原町駅で降り、地上へ出た。或る人物から郵送された地図を、焦げ茶色のカジュアルスーツのポケットから取り出し、老眼鏡越しに目的地を確認する。現在地は大きな十字路の角で、対面に郵便局が存在し、地図を回して局の位置を合わせた。大型車両やタクシー、自家用車が余裕を持って流れて行く。枝垂れ柳の歩道も肩が触れ合う程でもない。南に進み、一本目の道を右に曲がると、目当ての看板が眼に留まった。総二階建ての木造建築で間

口がそれ程広くなく、奥行きはある。この魚料理『相模屋』は向かいの寺の法事にも利用されると即座に思った。格子のガラス戸を引いて、群青色の着物姿の仲居に社名を告げると二階へと案内された。一階は四人掛けのテーブルが所狭しと並び、客は七分の入り。急な階段の上は細い廊下には接し、正面に唐紙で仕切った二間続きの部屋と、右手にも部屋が見える。階段前の一室に通された。一番乗りを自覚し、団栗眼に腕時計の文字盤を映す。会合の開始迄は後半周、分針が回る必要がある。低い四角のテーブルが三個繋がり、刺身入りの小鉢が並ぶ。運ばれたお絞りで顔と手を拭き、緑茶を啜る。唐紙の隙間からは子供のキーキー声が飛んできて、法事の一族郎党の集いだと直感した。奥の部屋からは大声が重なり合って聞こえてくる。アルコールがグルグル回っている様だ。聞き耳を立てても言語不明瞭で会話の内容がいま一つ判ら無い。懇親会か送別会なのか。自分も酔っ払

うとあの様になり、呂律が回らなくなるのかと我が身を振り返る。そんな事を考えていると、階段を昇る不規則な靴音が外耳道に侵入した。一個連隊の顔が次々に現われる。「今晚は、お客さんを待たせて済みませんね。揃って来ようとして遅れて

しまつて・・」と、運動で狸腹を引つ込めた知和ともかず

部長が詫げる。「いやあ、どう致しまして。俺も今着いた所だよ。忙しいのに悪いな」皆は適当に散らばつて、座布団に腰を乗せた。幹事の寛は刈り上げの逆三角形の顔に眼をギョロつかせ、出欠状況を報告する。「本日の参加予定は全員で十一名です。豊次主任研究員は他に寄つてから来るとの事で少し遅れるそうです・・」「しょうがない奴だなあ、先輩の大事な会なのに・・」「彼は奥さんに頭が上がりず、買物物を頼まれたんです。自分は休日には一人でゴルフ三昧ですから」「他には・・」
「憲一君は実験の切りがよい所までやってくるの

で、後一時間位掛かるとの事です。美智子さんは本日は有休で直接来ます」直に時刻がきたが、豊次と美智子が未だ顔を見せないのです、十分待つ事にした。新たに煙草に火を点けたり、喋りを続行させたりしている。間も無くして、腫れぼったい目付きで中年太りの豊次が遅刻を謝り、オールバックの髪に手を遣りながら部屋を覗いた。「斉に大きな拍手が湧いた。「豊次！今日は前が主役じゃないぞ。遅れるとは何だ！」部長が声を荒げました」口をふらし、豊次は主張する。「先輩の送別会に間に合わないとは。緊急事態や仕事なら仕方無いがな。何の用だったんだ？」「妻から、浅草に行くなら名物の芋羊かんを買つて来てと頼まれたもので」「ああ、芋羊かんね。中々旨いもんだ。俺も医者や親戚に持つて行つて飲ばれた。只、部長は時と場合を良く考えろと言つてるんだよ、な、そうだろ・・」「ま、そう言う事です」

知和部長が雅彦に対し、先輩と呼び、丁寧語を使うのには訳が有った。部長は十年前に薬理研究部の主任で、循環器グループのリーダーとして血圧低下剤を世に出した功労者の一人である。S製薬の生物研究所の化学療法部は設立以来二十八年間医薬品を何一つ上市していない。そこで、会社は勝ち組の知和を所屬長に据え、心機一転を計ったのである。社歴は雅彦の五年後輩。雅彦は部長室で、自分は年下なのに、運良く医薬品を開発出来て所屬長に任命された。しかし、微生物や癌の知識は殆ど無い。貴方の二十三年間の知識、経験、知恵で協力して欲しいと、要請された。その後、居酒屋で仕事や人生について腹を割って話し合える仲になり、先輩を立て、偉ぶらず、リーダーシップを發揮する部長に雅彦は惚れ、生涯、化学療法部で過ごす事を決意した経緯がある。

「未だ美智子さんが見えられませんが、これより雅彦主席研究員の停年退職の慰労会を開催したい

と思います。先ず、部長よりご挨拶と乾杯を宜しくお願い致します」話が長過ぎますとビールの利が抜けますので、簡単に致します。雅彦先輩は三十三年間に渡り、化学療法部に在籍され、日夜研究に励まれました。その結果、子宮癌や乳癌のモデルマウスの開発で癌学会学術賞を得、また薬学博士の学位も取得されました。そのモデルを用い、制癌剤の開発をして参りましたが、副作用が強過ぎるなどにより、後一步の所で上市を阻まれていきます。今後は、我々が後を引き継ぎ、一刻も早く市場に出して、先輩に報告する事をここに誓います。長い間のお勤め、誠に「苦労様で御座います。第二の人生が実り多きもので有ります様、お祈りし、乾杯致したいと思います。乾杯！」掛け声と共に、各人の大ジョッキが雅彦のジョッキに代わる代わる心地好い音を響かせる。

暫くして、隣の明美が立ち上がる。「部内旅行の宴会での替え歌や自作の歌が聞かれなくなるのは淋

しいとよ。お身体にご留意なされ、たまにはお顔を
をお見せ下さい。ご卒業お目出度う御座いますた
い」

明美は花束を雅彦の両手に渡したポーズで、カメ
ラのフラッシュを浴びる。盛大な拍手が廊下にも
溢れた。「豪華なお花を有難う。淡黄色の竜舌蘭
白色小花の霞草、紅いカーネーションなど見事な
ものだ。見守り続けてくれた両親の仏壇に飾らせて
貰うよ」眼。パッチリの明美は雅彦の好みのタイ
プだが、既に二男二女の母である。雅彦の提案で、
失敗や成功の思い出話をする事になった。一番バ
ッターは部長。「四年前、勇主席が薬科大微生物学
の助教へ転職すると言った時、慰留したが、一
つも製品化出来ず、挫折感の塊になったので、余
力の有る内に基礎研究と研究者の卵の育成をした
いと主張された。返す言葉も無かった。補充も出
来ず、経費も削減され、しよばくれていた自分を、
先輩は居酒屋に誘ってくれました。残った皆で一

丸となつて頑張りましょうと、逆に励まされたも
のです。あの時程、真の仲間が居るんだと思えた
事は無かった。先輩、有難う御座いました」「皆一
人一人、仕事観、人生観が違う。健一主任は早期
退職制度を利用し、実家の岐阜に戻り、農業を手
伝いながら焼き物とテニスをしている。また、進
君は友人と熊本で薬局を開業した。俺は他に何の
取り柄も無いからズルズルと現在に至つた。しか
し、制癌剤を商品化したいと熱意は人一倍強い
と自負している。どうか、皆さん、俺と違つて勝
ち犬になつて下さい。豊次君は何か有りますか……」
「ええ。或る日、臨床試験を希望された横浜市立
大の産婦人科教授に動物の試験結果を紹介した時
の事です。教授に二次会のカラオケまで付き合ひ、
翌日会議があるからと、深夜タクシーを飛ばさせ
ました。料金節約のため二人乗車し、東京湾岸高
速道路で停車させ、先輩は別の車に移り、走り去
つたのです。恐ろしい事を平気でやる人だとビビ

ッてしまいました。「深夜の上りで、車がかなり空いていたからだよ。ビュービュー擦れ違っていたら出来んぜ。ペーパードライバーですが、正直言つて、高速道の駐停車、Uターン禁止は酔って忘れていたわ。豊次君にはパソコンを何度も教わり、心の中では物覚えの悪いおっさんだと思われていたと思います。また、主任時代が長かったので彼から大主任と呼ばれ、悲しい様な、若い主任と区別され嬉しい様な複雑な心境でした」続いて、尖った顎の上の細長い口を眼一杯開いて、寛はジェスチャー入りで話す。「胃ゾンデを用い、ベンツピレン類の発癌物質を連日経口投与し胃癌を作成していました。が、気管に入れて肺炎を起こさせ、こっぴどく叱られました。貴重な時間と経費を無駄にしてしまったと。それからは、インクを水で薄めた、胃ゾンデで吸い、投与した後解剖してインクの在る場所を確認しました。一ヶ月間、微妙な挿入技術の特訓して下さったお陰で、今では百発百

中成功です」続いて昇が喋り始めた。「僕は仕事上の関係が余り深くなく、エピソードは無いです。しかし、一つだけ心残りが有ります。それは、大先輩と同じG大薬学部微生物教室出身の雪江と僕が、大先輩を差し置いて結婚した事です。今では、義母、妻と三人娘に囲まれ、大奥暮らしとなり、疲れ多い日々ですが、愉しい事も多々有ります。是非とも、定年後結婚をして頂きたいと思えます。・」。「男は幾つになつても子種が有るぞ」と茂が目をぎらつかせ畳み掛ける。万雷の拍手が湧き起こった。「もう、十年若かつたら声を掛けていた位のぼっちゃりやりでチャーミングな雪江さんですね。仕事から解放されたので、縁が有つたら結婚するか。・」冗談とも本気とも取れる雅彦の言葉が、笑みを伴い皆に返された。何処からとも無く、「フアイト！フアイト！」の手拍子になった。「明美さん、何か有りませんか。・」目の淵を赤くした寛が促した。「時効ですと、バラすたい」

雅彦の胸はドキッと大きな鼓動がした、何を暴露するのかな・。「実は私、大学二年の時からクラスメートと付き合っていて、入社三年目に別れてしまいたい。もう交際や結婚はしたくないと心に決めた」とよ。そんな折り、面食いの私は先輩の白衣姿をしみじみ見て、澄んだ瞳の奥に情熱を秘めた素敵な男性と思ひ始めたろうが。スポーツ万能で、特に野球、軟式テニスが得意ですばい。思ひは募る一方で、彼の事は一切忘れる事が出来たとよ」

「そんなに俺が役に立っていたのかね、ちーとも知らなかったな」「だけど、気付いてくれなからうが。三十五歳なのに何故独身なのかと皆不思議がってたばい。マウスの経口投与さ習ってた時、右手の胃ゾンデに注意が集中し、左の掌に捕まえたマウスば握り潰して、立て続けに三匹殺してしまつたとよ。凄え握力だと先輩に驚かれ、仕方無く、学生時代に弓道三段で両手の握力ば鍛えたたと伝えたい。風の便りに家庭的な女が好みと聞い

ておつたで、諦めたとよ」「悲しい恋物語があつたなんて、傍に居て判らなかつたなあ。それにしては、今では四人のお母さんになって、変わり身が早かつたんだ」同期入社の上がへの字の眉を下げて、合いの手を入れた。「その後、薬理研究所の誠一さんからデートを誘われ、ゴールインしたばい。色々有つたんけど、今は結婚して良かったと思つてます。先輩も愉しか家庭は築いてつかーさい」

「そうですね。バツ一の豊次主任も美人の奥様を仕留めた事だし。一度は結婚するのも経験かと・。」と部長が雅彦の目に笑顔を入れる。「皆さんに心配して頂いて、大変嬉しいですよ」

「次のコーナーに移ります。部長の方からお祝い品をお贈り下さい」「無事に還暦を迎えられ、お目出度う御座います。現在、寿命が延びて男も八十歳を越えたと思います。二十年以上も有る第二の人生が幸多き事を、一同お祈り申し上げます」

「思つてもいながつた贈り物を頂き、心より感謝

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。